梅沢富美男氏が語る
東北の過去と未来

東日本大震災

2011 年 3 月 11 日、震災が起き、私は慌てて車で娘を学校まで迎えに行きました。東京 23 区の交通は完全に麻痺、近くのコンビニには商品が何もない、これはただごとではないという予感と胸騒ぎに襲われました。テレビを通して東日本大震災のことを知った私は、すぐに「何かできることをしなきゃ」と思い立ちました。私は福島県福島市の出身です。親はそれぞれ九州と青森の人間で、戦争中の疎開をきっかけにまだ幼かった私と家族は福島市に移住しました。それから大人になるまでの多くの時間を福島や東北で過ごしましたから、ふるさとに何か恩返しがしたいと思ったのです。赤子にやるミルクがないという声を聞きつけ、ミルクの卸業者やメーカーに問い合わせをしましたが、なかなかとりあっていただけませんでした。幸い、私には後援会で支えてくださっている方達がいましたので、彼らにお願いして事務所にミルクを毎日何本かずつ送ってもらい、それを集めてトラックに載せて東北に出発しました。足りなかった分は被害のなかった九州方面の卸問屋や、日本の粉ミルクを海外に輸出している業者を探して売ってくれないかと頼み込みました。こうして救援物資の量と支援の回数を増やしていき、食料の次は衣類などの物資の提供、そしてお祭り好きの東北の子供たちのためにお祭りを小学校で開催もしました。また大船渡消防署の水難救助隊の副隊長さんと知り合うきっかけがあり、私の母のふるさとである青森の方々にも協力してもらって、大船渡市に倉庫一杯の野菜等を届けたり、大鍋で炊き出しをやることもできました。

ただ、寄り添う

現地では、そのあまりの凄惨な光景に言葉を失ったものです。両親を津波で失った幼い子供、子供や孫が行方不明になった高齢のおばあちゃん、彼らにかける言葉が私には見つかりませんでした。明日からどう生きていけばよいかわからない、絶望の深い人達を前にして、人は軽々し

い言葉をかけることはできません。相手が本当に欲している支援や言葉はいくら想像してもわからないものです。だからこそ、自分が支援をして「あげた」と考えたり、自分のやったことに対して相手に見返りや感謝を期待してはならないのだと思います。世間体や面子、自分の PR のために支援をするのは最悪です。自分本位の考え方では、相手の気持ちに寄り添うことはできません。そして相手の気持ちに寄り添っていなければ、ボランティアや支援としても失敗するでしょう。人にやさしくするって、単純なことのようでしょう？ でも、実はすごく奥が深く、また難しいものなんですね。いかに自分を脇において、想像力を働かせて相手の立場を考えることができるか、それが支援にとって大切なのです。私も今回の復興や支援を通して多くのことを学びました。

豊かな東北の未来

東北にはね、ないものはないんです。海、山、米、野菜、肉、全てそろっています。こうした食の豊かさに加えて、四季折々の顔を見せる自然、世界遺産、温泉などたくさんの魅力的な観光資源もあります。また、加工品やブランドの食材も多くありますね。私のおすすめは、福島の果物（桃）、喜多方ラーメン、宮城の海産物 (牡蠣やホヤ)、岩手の白金豚、前沢牛などです。こうした東北の魅力は今後も復興の原動力となっていくことでしょう。

東北出身の私が被災地の皆さんに是非お伝えしたいこと、それは「もっとはっきり主張・PR する」ということです。東北の人って寡黙な方が多いでしょう？震災復興ではコミュニケーションや支え合いが大切です。よく話す、人見知りしない、仲良くする、これらのことを常日頃心がけるだけで、コミュニティーと支援の輪がもっと拡がるのではないでしょうか。私の時代の人間は「遠くの親戚より近くの他人」といって他人同士でも家族のように支え合ったものです。家族や親戚に限らず、近くの人たちと積極的にコミュニケーションを図ることが、より力強い人々の絆を生むことを戦後身をもって見てきました。こうした人々の絆の力で、豊かな東北の魅力を他県や海外に向けてどんどん発信していけば、必ずよりよい未来が待っている。私はいつもそう信じています。

PROFILE

1950 年 11 月 9 日生まれ。福島県福島市出身。1 歳 7 ヶ月で初舞台を踏み、15 歳から兄・武生が座長を務める「梅沢武生劇団」で本格的に舞台に立つ。舞台では二枚目から三枚目、女形まで幅広い役をこなし、脚本・演出・振付も手がけるほか、テレビドラマや映画などにも俳優として多数出演。